

トッパンサリによって国有林公社のチーク林では正に厳正保続の林業が営まれている。最近では山地のメルクシマツについてもトッパンサリが導入され、それなりの成果をあげている。

自然環境と社会環境が非常に厳しい低地熱帯降雨林地帯での迅速、確実な造林方法としては Agrosilviculture に頼る以外に途はないとするのが共同研究事業に加わっての結論である。

〔参考文献〕 1) 吉良竜夫：低地多雨林，熱帯林の生態 人文書院 p. 31 (1983) 2) 高須久：カリマンタンの地形，地質と森林開発，熱帯林業 No. 17. p. 18 (1970) 3) Transmigration Area Development Project: Rainfall Records, East Kalimantan. Transmigration Area Development. Samarinda, East Kalimantan (1982)

新刊紹介

◎木材生産のためのユーカリ (HILLIS, W. E. & A. G. BROWN 編著; Eucalypts for Wood Production. CSIRO/Academic Press, Inc., 434 pp, 1984,

邦価約 16,200 円)

ユーカリは、その生長が早いことから最近では、緑化木として多くの国々で導入、植栽されており、もはやそれほど珍しい樹種とはいえなくなってしまった。ユーカリに関しては、オーストラリアを中心に多くの論文が書かれている。しかし、それらを取りまとめたユーカリ専門の総合書はあまり多くなく、内容もどちらかといえば、造林の手引き書に終わってしまうことが多かった。したがってわれわれにとっては、まだまだ未知の樹木なのである。

本書は、ユーカリを専門に取り扱った著書で、1978年に CSIRO が刊行したものの再版であるが、旧版が手元にないため残念ながら対比して紹介することはできない。これまであまり大きく取り上げられなかった、ユーカリ林の経営や木材利用についても、多くのページを使って説明しており、興味深いものになっている。しかし、ユーカリに関して、多くのことを言及することに重点が置かれ、全体を通して写真や図版が少ないのが残念である。もっとも、項目が多いことゆえ、そこまで望むのは一読者のわがままだろうか。

現在、インドなどでユーカリの造林をめぐって、その弊害が表面化している。すなわち緑化木であるはずのユーカリが単なる「換金作物」として扱われ、住民の生活に寄与していないという。また、用途が限られているということもよくいわれる。いずれにしても、それらの問題がすぐにユーカリのもつ特性を否定するものにはならないが、今一度ユーカリの有用性を正しく認識する必要がある。本書は、このような岐路に立たされているユーカリを見直す上で、大いに役立つものとなるにちがいない。(星川智之)